



ウルヴァリン
SAMURAI



感情と肉体の両面で
新たなウルヴァリンを表現した
ヒュー・ジャックマン

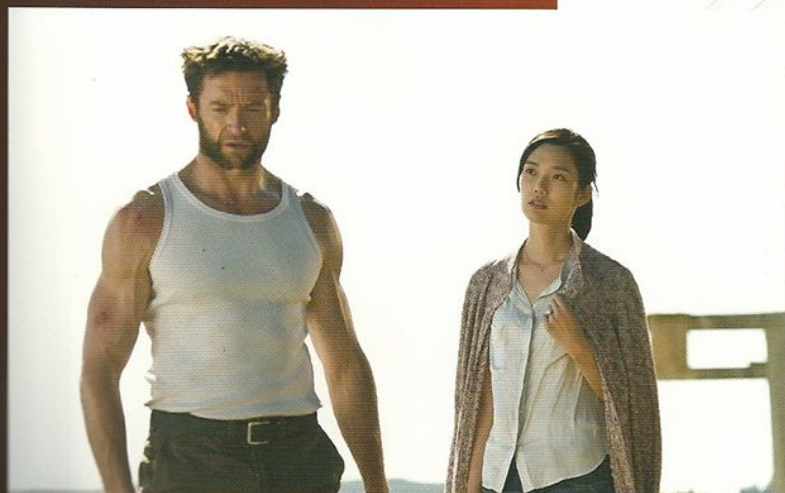
『ウルヴァリン：SAMURAI』は、ヒュー・ジャックマンがローガン／ウルヴァリンを演じる6本目の作品だ。しかし冒頭でローガンが置かれた状況は、これまでとは全く違っている。「ローガンはつねにマイペースで生きてきたが、本作の始まりでは観客が今まで見たことがないほど孤独に陥っていて、世の中に嫌気が差している。なぜなら、彼は武器として生み出されたことに強い反発を感じているからだ。それに自分が社会にとって危険な存在だと感じている」。プロデューサーも兼任したジャックマンが説明を続ける。「今回のローガンは今までよりも傷つきやすく、さら

に大きな危険に直面し、かつてない怪物ぶりを見せる。彼は自分の正体を見極めようと苦しみ、存在の意味を知りたいと悩んできたが、本作では本当の自分を受け入れるかどうかの選択に向き合うことになるんだ」。

ジャックマンはローガンを日本に連れて行くことをとりわけ喜んだ。「日本は他とは全く違う国で、この映画には日本の雰囲気かじり出ている」。ジャックマンが語る。「ローガンは日本で暮らし、これまで普通だと思っていた人との付き合いや状況判断のやり方を放棄する。そこでは初めからやり直すしかないからだ。日本は独自の文化と歴史を強く意識している国だから、ローガンはこの見知らぬ世界では孤立したよそ者だ。彼はサムライの掟や鍛練、儀礼について学んでいく。最初は懐疑的だが、物事を観察し適応していく。そして戦士としての身分、日本人の人に仕えるという意識に敬意を抱くようになる。彼は自分を向上させ、今までよりもよい人間になっていくんだ」。

またジャックマンは、ローガンを肉体的にも新たなレベルに成長させることに真剣に取り組んだ。「今回の台本はこれ

まで以上に感情的な部分を演じるチャンスだったが、肉体的な面でも同じように挑戦したいと思った。撮影前の準備期間にはかなりの時間をかけてトレーニングに励み、厳しいダイエットを続けた。ローガンは無駄のない絞まった体つきで、静脈が浮き出て血管や筋肉がよく見え、しかもとてつもないパワーがあるように見えることが肝心だ。私は以前からスクリーンで彼を観た人たちに“うわっ!”と驚いてほしいと思っていたんだよ」。



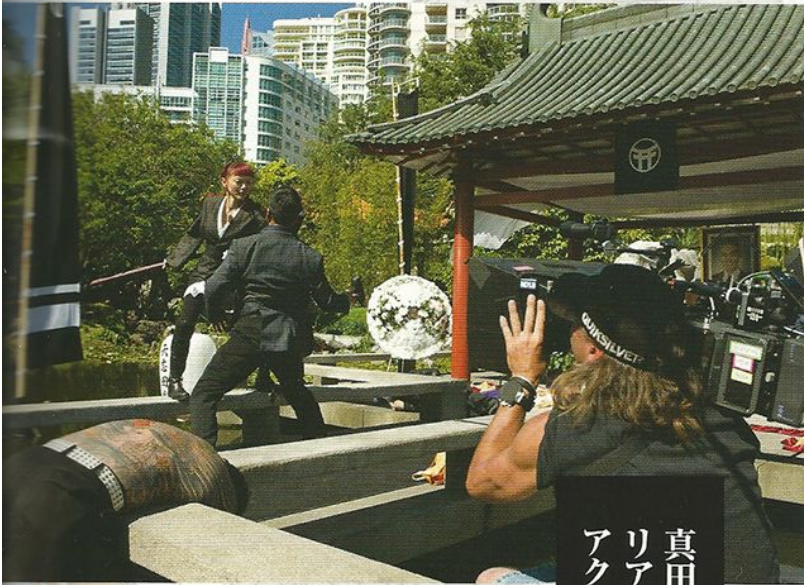
ジャックマンはジェームズ・マンゴールド監督と組んだことで、この企画を実現したい気持ちをいっそう強めた。『ウォーク・ザ・ライン／君につづく道』でジョニー・キャッシュの物語を魅力あふれる愛と反抗のドラマに仕上げ、『3時10分、決断のとき』で往年の傑作西部劇を現代的にアレンジしてみたマンゴールドは、ローガンのキャラクターに新解釈をもたらし、異国への旅に連れ出す監督として適任だった。

マンゴールドはこのチャンスを歓迎した。ローガンが訪れる日本では、現代的なハイテクがあふれているのと同じように、重い伝統や隠された社交儀礼が守られている。「本作でローガンが行くのは現代の日本、熱に浮かされた夢のような世界だ。そこは謎めいた裏社会の組織、サムライ、実業家による

主人公の境遇に
サムライ映画を重ね合わせた
ジェームズ・マンゴールド監督

犯罪、謎と神秘主義が満ちた世界なんだ」。

日本を舞台にしたことで、マンゴールドとジャックマンはローガンを新鮮な視点で捉えた。彼を“浪人”に重ね合わせたのだ。「封建時代の日本ではサムライは主人に仕えていたが、浪人というのは仕える主人がいないサムライのことだ。つまり浪人は目的がなく、主義を持たない戦士のような存在なんだ」。監督が解説を続ける。「ローガンを大義にかかわる一員に引き込んだ人々の多くが、もうこの世にはいない。だから彼は一人で取り残され、命令を受けることもなく、何をしてもいい状況にいる。これはアメリカの西部劇やサムライ映画に共通する設定だが、今回はローガンをそこに当てはめることにしたんだ」。



真田広之やスタント・チームが貢献したリアルで独創的なアクション・シーンの数々

今まで見たことがないほどリアルなアクションの創造に意欲を燃やしたマンゴールド監督は、第二班監督およびスタント・コーディネーターのデヴィッド・M・リーチと彼が率いるスタント・チーム、87イレヴンを起用し、振付とキャストのトレーニングを任せた。「この映画が他と違うのは、アクションの90%を俳優だけで見せているところだ」。マンゴールドが指摘する。「現実的なアクションを見せたかった。人間同士が一对一で向き合う闘いには、真に迫った凄みがあるからだ」。

その方針を受けたリーチは俳優たちとトレーニングに取り組み、剣の振り方からハイキック、アダマンチウムのツメによる攻撃まで、映画の大がかりな戦闘シークエンスに備えた。「我々が特に目指したのは、忍術と武道に備わった日本の美学を表現することだったが、同時にファンタジー風味を混ぜ合わせたんだ」。リーチが語る。「驚くような離れ技や軽業が見られるし、振付にはサムライ映画の無駄のないミニマリズムが生かされている。とにかく楽しめて、クールで個性的なアクションを生み出すために頭をひねったよ」。

またシンゲン役の実田広之が武道に精通していたため、福島リラらの他のキャストは、彼のアクションに関する幅広い知識の恩恵を受けた。さらに真田は監督やスタント・コーディネーターと協力し、ローガンとシンゲンが矢志田郎で激突する決闘シーンにおいても数多くのアイデアを提供した。真田がその一つを打ち明ける。「ローガンは左右にツメを持っている。ならばシンゲンも二刀流でやり合うアクションをやってみたいと、リハーサルの段階で監督に提案したんだ」。



ローガンの日本での旅に深く関わるのは、二人の日本人女性である。ローガンと複雑なラブ・ストーリーを織りなすマリコと、ローガンのボディガードを務めるユキオ。それぞれのキャラクターを演じるTAO、福島リラは共にオーディションでこの大役に起用され、自然らしさを保った個性でフィルムメーカーたちの支持を得た。マンゴールド監督が語る。「TAOとリラは二人とも生まれつき女優としての才能があって、個々の役ですばらしい姿を見せてくれた。彼女たちは美しく物凄いエネルギーの持ち主だが、それでいて全く違う個性を発揮したんだ」。TAOは有力な実業家の娘というマリコの背景と、彼女自身の変化に興味を引かれたと語る。「マリコは普通の女性ではいらなかった。映画の冒頭では、彼女はひどく絶望している。その後、ローガンに会って、自分が人生で

自然な存在感と鮮烈な個性を発揮し、大役を演じきった TAOと福島リラ



望んでいたものが何かを自覚するようになり、少しずつ変わっていく。そういう変身する姿が私にはとても面白かった」。ジャックマンはそんなTAOの自然な役作りにも衝撃を受けたと振り返る。「TAOはカメラの前で役の内面をさらけ出す能力を持った女優だ。ローガンが日本に着いたときには、彼は誰とも、何事にも関わりたくないと思っている。でもTAOの演技を見れば、ローガンがマリコの神秘的なエネルギーに引き込まれずにはいられなかったことが分かるはずだ」。

一方、福島リラはユキオの変化に富んだ強烈な個性に引かれたという。「面白いと思ったのは、体を使ったアクションと彼女の冷酷な性格だった。それにユキオのキャラクターにはユーモアを表現できる可能性もあった」。彼女がハードな撮影を振り返る。「トレーニングは優秀なスタント・チームと一緒にだったので、体を使った動作について全部教えてもらった。剣の使い方、キックボクシング、戦い方、それにウェイト・トレーニング。こんなことは初めての経験だったけれど、とても楽しかった」。

ローガンとショッキングな取引をしようとするシンゲン・ヤシダの父親、ヤシダを演じたのは日本人俳優のハル・ヤマノウチだ。ヤマノウチは、この印象的な役に非常な魅力を感じた。「ヤシダはとても強大なキャラクターで、シェイクスピアを思い出してしまった」という。ヤマノウチは、ヤシダが持っている野心を理解しようと、実在の日本の実業家の経歴や人物像を参考にした。「彼は日本経済を動かす実力者の一人で、そういう人は強い責任感を持ち、しかも、日本という国の運命と自分は一心同体だと思っている」。